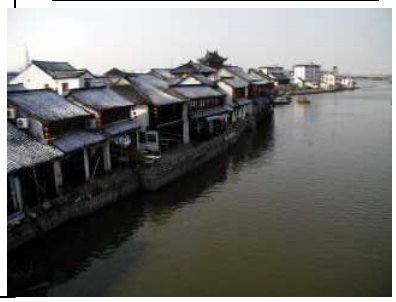
故郷第八場面　読んだ読んだ

三年一組　氏名

母とホンルとは寝入った。
わたしも横になって、船の底に水のぶつかる音を聞きながら、今、自分は自分の道を歩いているとわかった。……もともと地上には道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。



主人公は主人公の人生、ルントウはルントウの人生を歩いていることに、主人公は気づいたのだろう。主人公とルントウとの距離は遠くなったけれど、ホンルとシュイションには、そうなってほしくないと強く願っている。また、しゅじんこうはやルントウ、ヤンおばさんのような生活を送ってほしくなく、主人公たちの経験しなかった生活を送ってほしいと期待している。ルントウが、香炉と燭台をほしいと望んだとき、主人公はルントウが生きる気力を失い、神様に祈るしかないことをバカにして笑った。しかし、主人公も希望を持つだけで何もしていなかったらルントウと同じだと言うことに気がついたのだろう。最後に、主人公はだめになっていく中国の人々に、それではいけないということを知らせ、新しい中国を目指そうと言いたかったのである。

さん

主人公は自分を見つめ直した。今まで諦めの気持ちが強かった主人公は、希望を持てるようになった。主人公は、自ら変わろうともせず、はじめから紙に頼ろうとするルントウを笑った。だが、主人公もルントウと同じであった。そして主人公は今までのルントウとの出会いや情けない自分自身との出会いから、自ら行動を起こさなければいつまでたっても希望は叶わないことを学べた良き人生経験となった。

さん

主人公の希望とは、シュイションとホンルに無駄の積み重ねで魂を磨り減らしてきた私や打ちひしがれて心が麻痺する生活を送ってきたルントウのようにならず隔絶しないことが主人公にとっての希望だ。主人公はただ希望を持つだけじゃ何も変わらないということに気づき、これからは努力をしてきっと変わるだろう。

くん

主人公の希望は、ホンルとシュイションに、主人公とルントウのような隔絶した関係にはなってほしくないということである。また主人公やルントウ、ヤンおばさんのように、周りの環境の影響で人格を押しつぶしてしまうような人生も送ってほしくないと思っている。だが、その希望は、手製の偶像に過ぎないものだということに主人公は気づいた。それはルントウの偶像崇拝と同じようなものだということにも気づいた。そんな主人公は、自分で努力もせずに周りに期待するだけの生き方をやめ、自分で新しい道を作ろうという生き方に変わった。

くん